



痛くない死に方

在宅医療のスペシャリストとして全国的に知られる“町医者”長尾医師著の10万部売れたベストセラー『痛くない死に方』『痛い在宅医』をモチーフに高橋伴明監督が完全映画化。人生の最期を病院で迎えるか、自宅で迎えるか。2500人を看取ってきたという長尾医師の経験を踏まえ、老境に入って「死を意識し始めた」という高橋伴明監督が、他ならぬ自身の問題として真摯に問う。



けったいな町医者

長尾医師の日常を記録した本作は毛利安孝が監督を務めたドキュメンタリー映画である。新型コロナウイルスが猛威を振るう直前の2019年末、兵庫・尼崎の町医者として24時間365日生と死を見つめ続ける長尾医師の医療現場を捉えた。本作を鑑賞した長尾医師は「けったいな医者やなあ。この作品をみて、一番僕がそう思いました。町医者という言葉が嫌う在宅医がいます。大病院の医者より下に見られる差別用語だと。でも僕は『町医者』にこだわりたい。その理由はこの作品をみてください。僕をこんな町医者に育ててくれた患者さんすべてに、感謝を込めて」とコメント。

「痛くない死に方」+
「けったいな町医者」予告編



最後にこの春、全国公開される2本の在宅医療の映画を紹介させて頂きたい。映画「痛くない死に方」は僕が原作と監修をしました。もう一本はドキュメンタリー映画「けったいな町医者」で、僕の日常が描かれています。もしも機会があれば是非ご覧ください。参考になると思います。

たく報道されていないので地域包括支援センターのスタッフはあまり知らないのかもしれませんが。貴方の場合はフルリモートワークが許可されたとのことですが、これは大変な幸運です。テレワークは在宅介護者にとっては大変有利です。ちなみにコロナ禍のなか同様な選択をされた子供さんたちは全員がフルタイムで出社しながらの在宅移行でした。しかし

貴方のようなリモートワークは在宅介護を担う上でたいへん有利になるかと思えます。しかし、地域包括支援センターが在宅移行を勧めない理由は特養が狭き門で、そこを一旦出たら再度入所するまでには相当なハードルがあるかもしれないからです。どうしてもそのリスクを考えがちです。在宅介護は人によっては苦行かもしれません。しかしそうでは

なく、むしろ楽しんでいる人も沢山います。娘さんがそれを担う場合は、長年の親子関係により、親子関係が良くないと絶対にうまくいきません。でも貴方の場合は良好な様にお見受けしました。在宅療養を成功させるコツはなんといいってもケアマネと主治医と在宅主治医選びにかかっています。この3者が同一法人であることは通常は稀でしょう。たとえ法

人が別であっても3者の連携が良好であることが絶対条件です。そしてなによりも貴方の選択を支持してくれないと困ります。医者とかケアマネのどちらから入っても構いません。地域包括支援センターが地域の在宅スタッフの情報を豊富に持っているのでは非頼ってください。もしも介護が長期間におよび貴方が疲れたならばショートステイを利用して休養してください。それでもダメなら「ロングシヨート」を利用しましょう。ロングシヨートを何か月も続けている人もいます。もといいた特養はお母さまをよく知っているので快く受けてくれるはず。僕は絶対に大丈夫だと思えます。



在宅医療は健幸医療

長尾 和宏

医療法人社団裕和会・理事長
長尾クリニック・院長

今回は名古屋在住、52歳の女性（独身、ソフトウェア開発会社勤務）からのご相談です。



今年82歳になる母は重度の認知症で6年前から特養に入所しています。毎週土日は必ず面会に行っていました。コロナの影響で面会禁止となり、以前ケアマネさんがコロナが落ち着いたら施設の面会は再開されるからゆっくり考えましょうと、言ってくれましたが、母はもう半年以上会えていません。父は30年前に癌で亡くなりました。私はフルタイムで仕事をしているため、この先も特養でお世話になるつもりでしたが、このまま会えない期間がいつまで続くのかと思うと母の状態悪化も心配ですし、私自身もつらいので、在宅介護を考えるようになりました。上司に相談したところでも心配してくれ、完全に出社せず自宅の仕事ができるフルリモートワークにしてください、時間と生活費のめどが立ちましたので、母を自宅で介護しようと思いましたが、しかし、地域包括支援センターの方に相談したところ、重度の認知症で日常生活を自分でこなすこともできず全面的に介助が必要な母を身内でもない独り身の私が仕事をしながら介護するのは難しいと言われ、反対されてしまいました。やはり包括支援センターの方が言われたように仕事をしながら車いすを使用している認知症の母を自宅で介護することは難しいのでしょうか。介護と仕事を両立されている方はたくさんいらっしゃると思うのですが。長尾先生、ご意見、アドバイスをよろしくお願ひ申し上げます。

お答えします！

「親孝行したい」という想いがひしひしと伝わってきました。母親の貴方の決心を応援したいと思います。

お父様が亡くなられた後の30年間にいろんなことがあったのでしようね。コロナ禍で半年も会えないし、今後も見通しもつかないし、万一の死に目にも会えないという切なさは一とおでしよう。

実はコロナ禍のなか、同様な選択をした方が私の周囲に数人いますが、看取った方もまだ療養中の方も、在宅介護を後悔している人は一人もいません。看取られた方は皆さん「良かった」と、言葉が間違っているかもしれませんが、大満足されています。

正社員でフルタイムの仕事しながら要介護5の親を在宅介護している方をこれまで数名見てきました。皆さん、介護保険サービスやNPO法人のサポートや兄弟など身内の支援をフル活用しています。デイサービスやショートステイの活用は必須です。ただそれだけなのですが、そんな現実はまだ



たった2カ月であったが、ずっと長尾先生の後を懸命に追いかけた日々だった。そこで確信できたことは、尼崎というバイタリティに溢れる町と人が長尾和宏という「けったいな町医者」を求め、作り出したということだった。この町では「病」以上に「人」と向き合わなければ医者として確実にボロが出る。この撮影を経て、今まで以上に人間が好きになった。そして今この瞬間も、胸ポケットに携帯電話を忍ばせて長尾和宏は患者たちとまっすぐにつながっている。

— 監督・毛利安孝 —

上映劇場詳細は「けったいな町医者」製作委員会公式ホームページ <https://itakunaishinikata.com/>

長尾先生の連載記事「在宅医療は健幸医療」(P22) を掲載しています。ぜひお読みください。 編集部

きらめき⁺プラス
Volunteer

2021 March Vol.88



里親制度の啓発及び支援活動

岩朝 しのぶ

“おひとりさま”の終活？ 法律のプロが教えます

國安 耕太